

中学生から青年期後期にかけての関係性攻撃の安定性と主張性、社会的スキルおよび適応感との関連¹

梅津 直子* 会沢 信彦**

The Stability of Relational Aggression from Middle School Age to Late Adolescence: Links to Assertiveness, Social Skills and Sense of Adaptation.

Naoko UMEZU, Nobuhiko AIZAWA

要旨 本研究の目的は、中学生から青年期後期にかけての関係性攻撃の安定性を明らかにし、関係性攻撃と主張性、社会的スキルおよび適応感との関連について検討することである。大学・短大・専門学校に所属する青年期後期の学生254名に対して、中学生当時の関係性攻撃を回顧する質問紙調査を実施した。分析の結果、中学生から青年期後期にかけて関係性攻撃は安定しており、一部は高いまま維持されることが示された。現在の関係性攻撃と同時点の適応感には問題が示されなかったが、関係性攻撃が高く維持される場合、適応感が低下することが示唆された。また、関係性攻撃者の全体的な傾向として一部の主張性と社会的スキルが関係性攻撃傾向の低い者より優れていた。特に、社会的スキルが高い関係性攻撃者は、スキルの低い関係性攻撃者に比べて適応感が高かった。以上の結果を踏まえて介入への示唆について考察を行った。

キーワード：関係性攻撃，学校適応，社会的スキル，主張性，いじめ

問題と目的

関係性攻撃 (Relational Aggression) とは「仲間関係や仲間による被受容感にダメージを与えることによって、他者を傷つける行動」(Crick & Grotpeter, 1995) と定義される。具体的には、無視する、仲間はずれにする、陰口を言う、悪い噂を流す、仲間から嫌われるように仕向けるといった行動であり、人間関係を操作する攻撃である。このような攻撃形態はいじめにもよく見られる。例えば、文部科学省 (2021) による調査では、いじめの態様のうち「冷やかしかからかい、

悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」「仲間はずれ、集団による無視をされる」という2項目で全体の7割以上を占めている。言語的攻撃と重複があるものの、いじめの中で関係性攻撃が多く用いられていることが伺われ、いじめ問題を考える上で関係性攻撃に焦点を当てることは重要であると考えられる。

関係性攻撃者の適応問題

関係性攻撃の被害が精神的健康や心理社会的適応において様々な負の影響をもたらすことは周知の事実と言えよう。一方で、被害者のみならず、加害者自身も適応問題を抱えていることがこれまでの研究から明らかになっている。例えば、44件

* うめづ なおこ 文教大学生生活科学研究所

** あいざわ のぶひこ 文教大学教育学部発達教育課程児童心理教育専修

のメタ分析から、関係性攻撃が抑うつや不安と有意に関連することが示されている (Marshall, Arnold, Rolon-Arroyo, & Griffith, 2015)。これは攻撃によって仲間から拒否されやすいためではないかと推測されている。それを裏付けるデータも多数報告されており、関係性攻撃を多く行う児童は非攻撃児よりも孤独や仲間拒否を経験しやすいことが示されている (例えばCrick & Grotpeter, 1995; Kuppens, Grietens, Onghena, Michiels, & Subramanian, 2008; Ostrov & Godleski, 2013)。また、5年生から12年生にかけて8年間にわたる追跡調査から、関係性攻撃が高いと仲間からの人気が高く、その人気は比較的維持されるが、仲間からの好意は時間経過とともに低下していくことが示されている (Cillessen & Borch, 2006)。以上より、関係性攻撃を継続的に行うことによって、仲間から受容感が得られにくくなり、親密な対人関係がより重視されるようになる思春期から青年期にかけて適応や精神的健康を阻害すると考えられる。

関係性攻撃の安定性

持続的な関係性攻撃は心理社会的適応においてリスクになると考えられるが、関係性攻撃はどの程度安定した傾向であり、どのような発達の経過を辿るのであろうか。Fite & Pederson (2018) は関係性攻撃に関する研究を概観し、全般的な傾向として、関係性攻撃は3歳頃から生じ、児童期から思春期にかけて増加し、成人期前期に向けて低下していくと述べている。一方で、思春期・青年期の関係性攻撃や類似の間接的攻撃は比較的安定していることが複数の研究から示されている (例えばCillessen & Borch, 2006; Cleverley, Szatmari, Vaillancourt, Boyle, & Lipman, 2012)。また、集団全体の傾向ではなく、攻撃の変動をサブタイプで見た場合、低水準で減少する群、中程度で減少する群、高水準で安定する群などの発達の軌跡が見出されている (Cleverley, et al., 2012)。以上から、関係性攻撃は思春期から青年

期にかけて安定的な傾向を有し、一部は高いまま青年期に持ち越される可能性がある。

海外ではこのような長期の縦断研究が複数行われ、知見が蓄積されつつあるが、国内において長期的な安定性を検討した研究は見当たらない。日本人を対象とした6ヵ月および1年間の短期縦断研究があり、いずれも児童の関係性攻撃が安定していることが示されているものの (Kawabata, Crick, & Hamaguchi, 2010; Kawabata, Tseng, & Crick, 2014)、思春期から青年期にかけての関係性攻撃の安定性は不明である。

そこで、本研究では、青年期後期の学生を対象に、中学生時の関係性攻撃および現在の関係性攻撃傾向を尋ね、どの程度の安定性があるのか調査することとした。回顧法を用いた簡易的な手法ではあるものの、関係性攻撃の持続性によって適応感が低下するか否か検討を行う。なお、本研究において中学生時代を対象とした理由は、高校生に比べていじめの認知件数が多く、関係性攻撃を経験している可能性が高いこと、小学生時代と比べて想起が容易であると判断したためである。

国内における関係性攻撃と適応の関連

関係性攻撃と精神的健康、適応との関連については国内でも検討されており、関係性攻撃の加害はおおむね否定的な影響をもつことが明らかになっている。児童期において、男児で学校生活享受感と負の関連 (坂井・山崎, 2003)、抑うつ・不安、非行的行動と正の関連 (尾花・濱口・江口, 2013) が示されている。中学生では、抑うつ・不安、非行的行動と正の関連があり (濱口・渡部・臼倉, 2015)、関係性攻撃が高い者は被侵害・不適応得点が高い (櫻井・小浜・新井, 2005)。大学生では適応感が低く (桑原・永井・梅津・濱口, 2011)、ストレス反応、被拒絶感と正の関連が示されている (渡部・関口・三鈷・石隈・濱口, 2012)。

一方で、関係性攻撃が適応にプラスの影響をもたらすとの知見も存在する。児童期の女兒で抑

うつと負の関連が見られたことや（坂井・山崎，2003），中学生の男児のみ承認・満足と正の関連（梅津・新井・濱口，2012）が示されるなど，矛盾した知見も存在する．これは関係性攻撃を用いることで，自身が有利になるよう仲間関係を操作したり，加害相手に対する否定的感情を晴らしているためではないかと推察される．

関係性攻撃と社会的スキル

関係性攻撃者は仲間を操作するという攻撃の特性上，身体的攻撃などと比べ，社会的スキルに長けているという指摘がある．Fite & Pederson（2018）は関係性攻撃の発達的变化について，認知的・言語的スキルを習得することによって身体的攻撃は低下する半面，そのスキルこそが洗練された認知的・社会的スキルが要求される関係性攻撃を可能にすると述べている．実際に，磯部・佐藤（2003）は関係性攻撃を行う幼児は規律性スキルに乏しいものの，主張性や友情形成の社会的スキルは良好であることを示している．洗練された社会的スキルを用いることで，周囲からの受容感を損ねないように，さらには自身の社会的地位を高められるように関係性攻撃を使用している可能性がある．このため一部のスキルフルな関係性攻撃者は適応が高まるのではないかと考えられる．

他方で，中学生や大学生においては関係性攻撃が社会的スキル，コミュニケーションスキルや感情コンピテンスと負の関連をもつことが示されている（安達・東海林・三船・佐藤，2012；西野，2013；櫻井，2003）．年齢の上昇とともに，発達に応じた対人スキルの乏しさゆえに関係性攻撃を行ってしまう可能性も考えられる．特に，関係性攻撃を行う動機には「直接的コミュニケーション不安」があり，一部の関係性攻撃者は面と向かって何かを言うことで葛藤が生じることを恐れ，関係性攻撃を代替手段として間接的に訴えることが示唆されている（梅津・新井，2009）．よって，主張性スキルが乏しいために関係性攻撃を行う可能性があると考えられる．

以上より，本研究では青年期の関係性攻撃と主張性を含めた社会的スキルの関連についても調査し，社会的スキルが高い関係性攻撃者と低い攻撃者での適応の差異についても検討することとした．

関係性攻撃の性差

国外の関係性攻撃研究では性差の存在が指摘されてきた．Fite & Pederson（2018）は，児童期の関係性攻撃は男女で同程度だが，思春期では女子の方が高水準となり，成人期では一部，恋愛関係における関係性攻撃は女性で多く見られるものの，男女で再び同程度になると述べている．しかしながら，本邦における青年期の関係性攻撃については，測定尺度や評定方法，発達段階などにより一貫しない知見が得られている．中高生では，自己評定による測定では性差が見られないが（関口・濱口，2014；梅津他，2012），教師評定では性差が見られ，女子の方が高いことが示されている（渡部・濱口，2014）．大学生においても，性差がないとの報告がある一方（磯部・菱沼，2007），多次元的に関係性攻撃を捉えた場合，「操作」は男性の方が高く，「対恋人関係性攻撃」では女性の方が高いといった報告もある（濱口・戸田・金綱・中田，2012）．日本において性差が生じないのは相互協調的自己観の高い文化的背景によるものではないかといった指摘があり（桑原・関口・濱口，2013），さらなる検討が必要であると考えられる．そこで，本研究では，関係性攻撃の性差についても検討することとした．

本研究の目的

以上より，本研究では青年期後期を対象に，中学生時代と現在の関係性攻撃がどの程度安定しているのか調査し，主張性，社会的スキルとの関連および適応に及ぼす影響を検討する．詳しくは以下の4点について検討を行う

（1）関係性攻撃の性差を検討する．

（2）中学生から青年期後期にかけて関係性攻撃がどの程度安定しているか検討する．先行研究が

ら一定の安定性があり、関係性攻撃を高く維持する者がいると予想される。

(3) 関係性攻撃と社会的スキルおよび主張性との関連を検討し、関係性攻撃者の特徴を探る。

(4) 関係性攻撃と適応感の関連を検討する。過去・現在の関係性攻撃と適応感の関連を見ることで、同時点での影響と将来的な影響について示唆が得られると考えられる。特に、関係性攻撃を継続的に行っている者は適応感が低いと予想される。また、関係性攻撃者の中でも社会的スキルが高い者とそうでない者では適応のあり方が異なると考えられる。

方法

調査協力者

関東圏内の教員・保育者養成課程に在籍する大学2年生²、保育者養成課程に在籍する女子短期大学1年生、および看護専門学校1年生の計259名（男性31名、女性226名、その他・不明2名）を調査対象とした。各学校の性別の内訳をTable1に示す。データの不備が見られた5名の回答を除外し、254名（男性31名、女性221名、その他・不明2名）を分析対象とした。平均年齢は19.3歳（ $SD=3.60$ ）であった。

調査手続きと倫理的配慮

大学生、女子短期大生への調査は2019年7月に実施した。講義時間を利用して質問紙を一斉に配布、実施した。

看護専門学校生への調査は2022年7月にGoogle Formを用いたオンライン調査を実施した。講義時間中に、調査URLおよびQRコードを記載した依頼

文書を配布し、その場で回答するよう求めた。

調査依頼の際に、調査は無記名であり、個人が特定できる情報は収集しないこと、協力は任意であり、調査に協力しないことによる不利益は一切生じないこと、回答内容は成績に無関係であること、調査協力はいつでもやめることができる旨を口頭および書面で説明した。

質問紙の構成

過去の関係性攻撃 櫻井・小浜・新井（2005）によって開発された中学生を対象とする「関係性攻撃傾向尺度」を用いた。本尺度は「きれいな人が来たら、他の友だちを誘って別の場所に行くことがある」「みんなで話しているときに、きれいな人が来たら、その人が話に入れないような話をわざとする」などの13項目から成る。

本研究では中学生時代の関係性攻撃について回顧してもらうため、「次の文章は、中学生だったころのあなたにどのくらいあてはまりますか」と教示し、質問項目を過去形に修正した。「まったくあてはまらない（1点）」～「とてもあてはまる（5点）」の5件法で尋ねた。

現在の関係性攻撃 磯部・菱沼（2007）によって作成された大学生を対象とする「攻撃性尺度」から「関係性攻撃」を使用した。関係性攻撃の測定尺度は複数開発されているが、本尺度および過去の測定で使用される櫻井他（2005）の尺度は、櫻井（2002）を参考に作成されており、共通・類似した項目が含まれる。過去と現在の連続性を検討する本研究において適切であると判断した。

本尺度は「腹を立てた相手の悪口を、その人がいないところで他の人に話す」「あまり好きではな

Table1 調査対象者の内訳

	大学	女子短期大学	看護専門学校	合計
男性	14	—	17	31
女性	44	123	59	226
その他・未回答	—	—	2	2
合計	58	123	78	259

い人が会話に入ってきたとき、その人が分からない話題でも、気にせず話を続ける」などの7項目から成る。 α 係数により信頼性が確認されている。妥当性については、因子的妥当性および先行研究と同様の下位尺度間の相関関係や性差が示されたことから一定の妥当性があると想定される。「全然あてはまらない（1点）」～「非常にあてはまる（5点）」の5件法で回答を求めた。

社会的スキル Kiss-18（菊池，1988）を使用した。本尺度は、初歩的なスキル、より高度のスキル、感情処理のスキル、攻撃に代わるスキル、ストレスを処理するスキル、計画のスキルという6領域にわたる総合的な社会的スキルを測定するものである。広範な研究知見から信頼性、妥当性が確認されている（菊池，2004）。全18項目について、「いつもそうではない（1点）」から「いつもそうだ（5点）」の5件法で尋ねた。

主張性スキル 柴橋（2001）によって作成された自己表明尺度を使用した。本尺度は「限界・喜びの表明」「意見の表明」「不満・要求の表明」「断りの表明」の4つの下位尺度から構成されている。限界・喜びの表明は「友だちに強く言いすぎて悪かったと思ったときはその気持ちを伝える」「どうしていいかわからないことがあって困ったときは友だちに相談する」などの8項目から成り、肯定的感情や個人的な限界の表明、援助の依頼などに関する主張である。意見の表明は「まわりの友だちにどう言われようと正しいと思うことは自分の信念を貫く」「友だちに意見を求められたときは自分の考えをはっきり言う」などの7項目から成り、友人と意見が異なる場面で自分の意見を伝えたり、注意するといった主張である。不満・要求の表明は「友だちに怒りや不満を感じた時でもその気持ちを表さないようする（逆転）」「友だちの無神経な言い方で傷ついたときは自分の気持ちをはっきり言う」などの6項目から成り、友人の言動に対する不満や要求がある際の主張である。断りの表明は「友だちに誘われたときは都合が悪くても断らない（逆転）」「友だちに遊びにいこうと言われ

ても一人でいたいときはそう言って断る」などの5項目から成り、断る場面での主張行動である。

全26項目について「まったくあてはまらない（1点）」～「とてもあてはまる（4点）」の4件法で尋ねた。

適応感 青年用適応感尺度（大久保，2005）から「居心地の良さの感覚」と「被信頼・受容感」を使用した。居心地の良さの感覚は「周囲に溶け込んでいる」「周囲となじめている」などの11項目、被信頼・受容感「周りから頼られていると感じる」「周りから期待されている」などの6項目である。本研究では学校における適合性を測定するため、項目の文頭に「学校において」という文言を提示した。 α 係数により信頼性が確認されている。学校生活享受感や抑うつとの相関から妥当性も示されている。「全くあてはまらない（1点）」～「非常によくあてはまる（5点）」の5件法で評定を求めた。

結果

尺度の信頼性の検討

各尺度の合計得点を算出し、下位尺度得点とした。また、信頼性を確認するため α 係数を算出した。各尺度の平均値、標準偏差、 α 係数をTable2に示す。断りの表明を除き、全ての下位尺度で.69～.95と十分な信頼性が確認された。断りの表明に関しては.45と低い値であったため、信頼性が乏しいと判断し、以降の分析から除外した。

性差の検討

関係性攻撃をはじめとする各下位尺度に性差があるか検討するため、性別による t 検定を行った。その結果、関係性攻撃は過去・現在ともに有意な性差は見られなかった。社会的スキル、意見の表明、不満・要求の表明、被信頼・受容感については有意な性差が示され、全て男性の方が高かった（順に $t(33.26) = 2.13, p < .05$; $t(249) = 3.54, p < .001$; $t(248) = 2.86, p < .01$; $t(249) = 2.08, p < .05$ ）。

Table2 各変数の記述統計量と α 係数

	全体			男性			女性			α 係数
	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
過去RA	251	24.59	8.94	31	22.90	7.56	218	24.74	9.05	.88
現在RA	250	18.40	4.83	30	18.03	5.91	218	18.41	4.67	.77
社会的スキル	241	55.68	13.29	30	61.77	17.18	209	54.85	12.11	.94
限界・喜び	253	26.91	3.64	31	26.65	4.13	220	26.94	3.57	.77
意見の表明	253	19.18	3.43	31	21.13	3.84	220	18.86	3.26	.73
不満・要求	252	15.20	3.15	31	16.68	3.25	219	14.97	3.09	.69
断りの表明	253	14.38	2.34	31	15.00	2.29	220	14.27	2.33	.45
居心地の良さ	248	41.32	8.88	29	43.62	8.91	217	41.14	8.75	.95
被信頼・受容感	253	18.63	5.04	31	20.42	4.97	220	18.44	4.96	.92

注) RA = 関係性攻撃

関係性攻撃の安定性と各尺度の相関

関係性攻撃の安定性を検討するため、過去と現在の関係性攻撃について男女別に相関係数を算出したところ、女性で.49、男性で.85と中程度～高い正の相関が示された。中学生から青年期後期にかけて関係性攻撃はある程度安定していることが示唆された。

また、関係性攻撃と主張性、社会的スキルおよび適応感との関連を検討するため、同様に相関係数を算出した (Table3)。男性においては現在の関係性攻撃と有意に関連する変数は見られなかったが、女性では社会的スキル、不満・要求の表明との間に弱い正の相関が示された。さらに、男性において過去の関係性攻撃は限界・喜びの表明、不満・要求の表明との間に正の弱い相関が見られ

た。女性では、過去の関係性攻撃と意見の表明、居心地の良さの感覚との間に弱い負の相関が示された。

現在の関係性攻撃傾向が高い者の特徴

現在の関係性攻撃得点について平均値 \pm 1標準偏差 (13.57および23.22) を基準とした群分けを行った。その結果、関係性攻撃傾向が相対的に高いRA高群は36名 (男性6名、女性29名、その他・不明1名)、関係性攻撃傾向が低いRA低群は38名 (男性5名、女性33名) となった。

関係性攻撃の高低による差異を検討するため、各下位尺度得点においてRA高・低群による *t* 検定を実施した (Table4)。その結果、不満・要求の表明で有意な群間差が示され、RA高群の方が

Table3 男女別の相関係数

	過去RA	現在RA	被社会的 スキル	限界・喜び	意見	不満・要求	居心地の 良さ	被信頼・ 受容感
過去RA		.85 ***	-.05	.36 *	.35 †	.36 *	.13	.10
現在RA	.49 ***		-.04	.26	.21	.30	.03	-.07
社会的スキル	-.03	.17 *		.14	.37 *	.14	.08	.43 *
限界・喜び	-.08	.11	.38 ***		.63 ***	.59 ***	.22	.25
意見	-.11 †	.08	.53	.38 ***		.57 ***	.15	.54 **
不満・要求	.03	.23 ***	.23	.19 **	.58 ***		.23	.34 †
居心地の良さ	-.15 *	.07	.31 ***	.49 ***	.30 ***	.14 *		.43 *
被信頼・受容感	-.10	.07	.41 ***	.27 ***	.32 ***	.23 ***	.65 ***	

注) 上側は男性、下側は女性の相関係数を示す

† : $p < .1$, * : $p < .05$, ** : $p < .01$, *** : $p < .001$

高かった。他方で、適応感においては有意な群間差が示されなかった。青年期後期に關係性攻撃を行う者は、現時点での適応については低群と同程度であることが示された。

また、社会的スキルについては有意な群間差が見られなかったものの、女性において社会的スキルと相関が見られたことから、關係性攻撃者の特徴を知る一助とするため、社会的スキルの項目ごとに *t* 検定を実施した。その結果、7項目で有意差が示され、他人への指示、仕事の段取り、自己紹介、会話への参加、非難への対処、感情表現といったスキルはRA高群の方が高かった (Table5)。一方で、有意傾向ではあるものの、気まずいことがあった相手との和解についてはRA高群の方が低い傾向にあることが示された。

關係性攻撃と社会的スキルの高低による適応の差異

現在の關係性攻撃と社会的スキルについて平均値 ± 0.5標準偏差 (關係性攻撃は15.98および20.81、社会的スキルは49.04および62.33) を基準とした群分けを行った。その結果、關係性攻撃、

社会的スキルいずれも低い「低スキル低RA群」は20名、社会的スキルが高く、關係性攻撃傾向が

Table4 關係性攻撃の高低群における各得点

		低群	高群	t 値 (自由度)
社会的スキル	<i>M</i>	54.19	58.53	-1.25
	<i>SD</i>	14.50	15.06	(70.69)
	<i>n</i>	37	36	
限界・喜びの表明	<i>M</i>	26.95	27.92	-1.07
	<i>SD</i>	4.18	3.53	(72)
	<i>n</i>	38	36	
意見の表明	<i>M</i>	18.68	19.89	-1.50
	<i>SD</i>	2.95	3.93	(72)
	<i>n</i>	38	36	
不満・要求の表明	<i>M</i>	14.25	16.83	-3.46 ***
	<i>SD</i>	3.06	3.26	(70)
	<i>n</i>	36	36	
居心地の良さの感覚	<i>M</i>	40.97	43.23	-1.10
	<i>SD</i>	9.05	8.29	(68.76)
	<i>n</i>	36	35	
被信頼・受容感	<i>M</i>	17.79	18.47	-.54
	<i>SD</i>	4.82	5.94	(72)
	<i>n</i>	38	36	

注) ***: $p < .001$, 分散が異なる場合はWelchの検定を行った

Table5 關係性攻撃の高低群において有意差が見られた社会的スキル項目

		低群	高群	t 値 (自由度)
2. 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか	<i>M</i>	2.66	3.28	-2.39 *
	<i>SD</i>	1.05	1.19	(72)
8. 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか	<i>M</i>	3.03	2.61	1.74 †
	<i>SD</i>	.91	1.13	(72)
9. 仕事をするとときに、何をどうやったらよいか決められますか	<i>M</i>	2.79	3.33	-2.00 *
	<i>SD</i>	1.04	1.29	(72)
10. 他人が話しているところに、気軽に参加できますか	<i>M</i>	2.47	3.22	-2.61 *
	<i>SD</i>	1.08	1.38	(72)
11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片づけることができますか	<i>M</i>	2.55	3.11	-2.14 *
	<i>SD</i>	1.06	1.19	(72)
13. 自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか	<i>M</i>	3.08	3.64	-2.12 *
	<i>SD</i>	1.05	1.22	(72)
15. 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか	<i>M</i>	2.92	3.50	-2.03 *
	<i>SD</i>	1.28	1.16	(72)

注) 低群38名, 高群36名

†: $p < .1$, *: $p < .05$

Table6 関係性攻撃と社会的スキルの4群における適応感の平均値

		①低スキル 低RA群	②高スキル 低RA群	③低スキル 高RA群	④高スキル 高RA群	F値 (自由度)	多重比較
居心地の良さの感覚	<i>M</i>	40.25	46.64	38.79	45.43	5.18 **	③<②, ④
	<i>SD</i>	8.60	6.99	8.90	7.41	(3,85)	①<②
	<i>n</i>	20	22	24	23		
被信頼・受容感	<i>M</i>	17.70	19.54	15.50	21.38	6.98 ***	③<②, ④
	<i>SD</i>	3.16	5.03	4.81	5.11	(3,88)	
	<i>n</i>	20	24	24	24		

注. * $p<.05$, *** $p<.001$

低い「高スキル低RA群」は24名、社会的スキルが低く、関係性攻撃傾向が高い「低スキル高RA群」は24名、いずれも高い「高スキル高RA群」は24名が該当した。

これらの4群による適応感の差異を検討するため、分散分析を実施した (Table6)。その結果、居心地の良さの感覚、被信頼・受容感ともに有意な群間差が示された。多重比較 (Sidak法) の結果、低スキル高RA群は、高スキル高RA群および高スキル低RA群に比べて居心地の良さの感覚、被信頼・受容感が有意に低かった。また、有意傾

向ではあるが、低スキル低RA群は高スキル低RA群に比べて居心地の良さの感覚が低い傾向にあった。以上より、関係性攻撃を行う者の中でも、社会的スキルが低い場合は適応感が損なわれていることが明らかになった。

関係性攻撃の変動による差異

中学生時代から現在にかけての関係性攻撃の変動によって、どのような差異があるか検討するため、現在・過去の関係性攻撃得点に基づき、群分けを行った。平均値 \pm 0.5標準偏差を基準とし、現

Table7 関係性攻撃の変動群による各下位尺度の平均値

		低攻撃群	上昇群	高維持群	F値 (自由度)	多重比較
社会的スキル	<i>M</i>	57.43	57.27	55.34	.24	
	<i>SD</i>	14.72	15.44	12.94	(2,93)	
	<i>n</i>	47	11	38		
限界・喜びの表明	<i>M</i>	26.67	28.18	27.00	.62	
	<i>SD</i>	4.44	3.63	3.71	(2,95)	
	<i>n</i>	48	11	39		
意見の表明	<i>M</i>	18.73	19.45	18.92	.20	
	<i>SD</i>	3.13	4.23	3.68	(2,95)	
	<i>n</i>	48	11	39		
不満・要求の表明	<i>M</i>	14.17	16.18	15.74	3.50 *	高維持群>低攻撃群
	<i>SD</i>	3.08	4.38	2.88	(2,95)	
	<i>n</i>	48	11	39		
居心地の良さの感覚	<i>M</i>	42.39	46.45	40.21	2.45 †	上昇群>高維持群
	<i>SD</i>	9.34	8.36	7.13	(2,92)	
	<i>n</i>	46	11	38		
被信頼・受容感	<i>M</i>	18.46	19.18	17.97	.26	
	<i>SD</i>	4.78	6.43	5.09	(2,95)	
	<i>n</i>	48	11	39		

注) † $p<.1$, * $p<.05$

在、過去ともに関係性攻撃得点が高い群を「高維持群」、過去は低かったが現在は高い群を「上昇群」、過去は高かったが現在の得点は低い「下降群」、過去も現在も低得点の「低攻撃群」の4群を構成した。その結果、高維持群は39名、上昇群は11名、下降群は3名、低攻撃群は48名が該当した。

下降群は人数が少なかったため分析から除外し、高維持群、上昇群、低攻撃群の3群による分散分析を実施した (Table7)。その結果、不満・要求の表明で有意な群間差が、居心地の良さの感覚において有意傾向が示された。多重比較 (Sidak法) の結果、高維持群は低攻撃群に比べて不満・要求の表明が高く、また、上昇群に比べて居心地の良さの感覚が低い傾向にあった (ともに $p>.1$)。以上よ

り、関係性攻撃を継続して行う者は、不満・要求の表明を多く行っており、将来的な適応感が低くなる傾向が明らかとなった。

関係性攻撃が適応感に及ぼす影響

関係性攻撃が適応感に及ぼす影響を検討するため、重回帰分析を実施した。相関分析の結果から社会的スキル、主張性と適応感との間に正の関連が示されたことから、これらのスキルを駆使することによって対人関係が良好に保たれ、適応が促進されると考えられる。よって、社会的スキル、主張性も併せて説明変数に投入した。また、適応感には性差が見られたことから、性別についても女性を0、男性を1とするダミー変数として

Table8 居心地の良さの感覚における重回帰分析結果

	全対象者 ^a		社会的スキル高群 ^b		社会的スキル低群 ^c	
	β	95%CI	β	95%CI	β	95%CI
性別ダミー	-.08	[-4.72, .77]	-.14	[-4.58, 1.00]	-.09	[-6.33, 2.56]
過去RA	-.12 [†]	[-.26, .02]	-.22 [†]	[-.30, .02]	-.15	[-.43, .10]
現在RA	.05	[-.17, .36]	.27*	[.01, .52]	.10	[-.29, .67]
社会的スキル	.13*	[.00, .18]	.29*	[.06, .40]	.21 [†]	[-.02, .63]
限界・喜びの表明	.39***	[.66, 1.31]	.23*	[.01, .70]	.28**	[.17, 1.17]
意見の表明	.04	[-.34, .55]	-.08	[-.57, .33]	.24	[-.13, 1.43]
不満・要求の表明	.00	[-.41, .43]	.22	[-.06, .71]	.00	[-.82, .80]
F	10.50***		5.13***		4.53***	
R^2	.25		.36		.29	

注) ^an=229, ^bn=72, ^cn=84

[†] $p<.1$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

Table9 被信頼・受容感における重回帰分析結果

	全対象者 ^a		社会的スキル高群 ^b		社会的スキル低群 ^c	
	β	95%CI	β	95%CI	β	95%CI
性別ダミー	-.08	[-2.61, .48]	-.07	[-6.57, 3.50]	-.20 [†]	[-4.58, .23]
過去RA	-.08	[-.12, .03]	-.32*	[-.61, -.06]	-.10	[-.20, .09]
現在RA	.02	[-.13, .17]	.16	[-.18, .73]	-.12	[-.37, .14]
社会的スキル	.30***	[.06, .17]	.10	[-.18, .43]	.33**	[.07, .42]
限界・喜びの表明	.16*	[.04, .41]	.46***	[.54, 1.77]	-.02	[-.30, .24]
意見の表明	.08	[-.13, .36]	-.26 [†]	[-1.48, .12]	.12	[-.25, .59]
不満・要求の表明	.09	[-.09, .37]	.11	[-.43, .97]	.15	[-.20, .68]
F	10.51***		3.79**		2.93**	
R^2	.25		.30		.21	

注) ^an=233, ^bn=69, ^cn=84

[†] $p<.1$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

投入した。これらを統制した上でも関係性攻撃が適応感に影響をもたらすかを検討した。なお、関係性攻撃と適応の関連において社会的スキルは調整因になっていると考えられたため、社会的スキル高群、低群とに分けて分析を実施した。

重回帰分析（強制投入法）の結果、居心地の良さの感覚、被信頼・受容感のいずれにおいても有意なモデルが得られた（Table8・9）。居心地の良さの感覚においては、全対象者と社会的スキル高群で過去の関係性攻撃からの標準偏回帰係数が有意傾向となり、負の影響をもたらすことが示唆された。また、社会的スキル高群では現在の関係性攻撃からの標準偏回帰係数が有意で、正の影響を及ぼすことが示された。被信頼・受容感のモデルにおいては、社会的スキル高群で過去の関係性攻撃からの標準偏回帰係数が有意となり、負の影響をもたらすことが示された。

考察

関係性攻撃の性差について

関係性攻撃の性差に関しては過去、現在ともに有意ではなく、男女同程度であることが明らかとなった。この結果は、自己評定尺度で関係性攻撃の形態を一次元で捉えた場合、性差は見られないとする本邦の先行研究と一致するものである。日本においては、相互協調的な文化的価値観が強く、男女問わず対人関係が重視されることから、攻撃者にとって関係性を維持したり、害を与える有効な手段として男女共通に用いられているものと考えられる。

関係性攻撃の安定性について

関係性攻撃の安定性に関しては、中学生から青年期後期にかけて中程度～高い正の相関が示され、関係性攻撃の傾向はある程度の安定性があり、一定程度持続することが示唆された。前述した国内の児童期を対象とする短期縦断研究や北米における長期縦断研究においても関係性攻撃の安定性は.4～.5程度の相関があり、それらと一致する結果が

得られたと言える。関係性攻撃は数年にわたって安定した個人特性であり、特に男性では相関が高く、関係性攻撃傾向は変容しにくいと考えられる。

この結果は、関係性攻撃の変動群の構成においても支持された。全対象者中18.5%は関係性攻撃が継続して相対的に低い低攻撃群に、15.1%は継続して相対的に高い高維持群に該当した。対して、中学生時点から相対的に大きな変動が見られた群（上昇群・下降群）は全体の5.4%に過ぎない。以上より、関係性攻撃を多く行う者に対して早期に介入することが重要であると考えられる。

青年期後期の関係性攻撃者の特徴

関係性攻撃高・低群による t 検定の結果および変動群による分散分析結果から、関係性攻撃を多く行う青年は不満・要求の表明が高いことが明らかになった。予想に反して関係性攻撃者は一部の主張性が高いと言える。また、関係性攻撃者は一部の項目において社会的スキルが高いことが示され、関係性攻撃者は主張性を含め社会的スキルにおいて優れた一面を有していると考えられる。一方で、気まずいことがあった相手と和解するスキルは低い傾向にあった。関係性攻撃者は、友人に対して不満を抱く葛藤場面でアサーティブになることは可能だが、事態がうまく進展しない場合、解決に至る前に攻撃に至ってしまうのかもしれない。よって「思い通りにいかない場合、攻撃をするのはやむを得ない」といった攻撃の正当化をしている可能性も考えられる。

また、主張性の中でも限界・喜びや意見の表明では高低群の差が見られず、不満・要求のみで差が生じた点について、関係性攻撃者はそもそも葛藤を抱きやすい可能性が考えられる。濱口・藤原（2016）は高校生において関係性攻撃が仲間支配欲求、怒りや報復意図と関連があることを明らかにしている。怒りを感じやすかったり、自分の思い通りに周囲が動くことを強く期待しており、不快な感情を体験しやすいため、結果として不満を表明したり、攻撃を行っている可能性がある。

社会的スキルの高低による関係性攻撃と適応の関連の差異

社会的スキルと関係性攻撃の高低を掛け合わせて分析を実施した結果、スキルの高い関係性攻撃者は、スキルの低い関係性攻撃者に比べて適応感が高く、スキルのある非攻撃者と同程度の適応であることが示された。洗練された社会的スキルを用いることで、周囲からの受容感を損ねることなく関係性攻撃を行っているとする仮説は支持されたと言える。

加害者本人の適応には問題がないとはいえ、被害者にとって関係性攻撃は苦痛であるだろう。しかしながら、社会的スキルの高低によって、関係性攻撃の実態が質的に異なる可能性も考えられる。例えば、社会的スキルが高く、関係性攻撃の影響性に思い至る者であれば、陰口を言う際に相手が属していないコミュニティで憂さ晴らしをするなど、相手に害が及ばないようにしたり、嫌いな人と距離を取る際に拒否感を表に出さないように行動することが可能であると思われる。一方で、社会的スキルが低い場合、自身の敵意や拒否感を露わにしたり、仲間集団の雰囲気や壊すような振る舞いをしてしまい、周囲からの受容感が得られにくくなり、適応感を低めてしまうかもしれない。このような質的な差異の可能性も詳細に検討する必要があるだろう。また、社会的スキルが高くても関係性攻撃を行う者がいるという事実から、やみくもに社会的スキルを高めることが関係性攻撃の低減につながるとは限らない。しかしながら、被害者を傷つけず、周囲との関係を良好に保ちながら自身の葛藤に対処するスキルを習得することは被害者・加害者双方の適応にとって重要であると思われる。

過去の関係性攻撃による将来的な適応問題

相関分析の結果から、女性において過去の関係性攻撃と居心地の良さの感覚との間に負の相関が見られたこと、さらに重回帰分析の結果から社会的スキルや主張性、性別といった要因を統制して

もなお、過去の関係性攻撃から負の影響が示された。一方で、現在の関係性攻撃は適応感と関連が見られないか、社会的スキルが高い群においてはむしろ適応感を高める結果が一部得られた。以上より、現時点で関係性攻撃を行っていても即座に適応に負の影響を及ぼすのではなく、過去に関係性攻撃の加害経験を重ねることによって将来的な適応を損ねることが示されたと言える。特に、社会的スキル高群において関連が強く表れた点について、社会的スキルによってすでに適応が良好な者の中においては過去の関係性攻撃の有害さが際立って表れるのだと推察される。

また、3つの変動群による分散分析結果から、高維持群は上昇群よりも居心地の良さの感覚が低いことが示されており、中学生時代から関係性攻撃を継続的に行ってきた者は、現時点でだけ関係性攻撃を多く行う者より、適応感が低いと言える。関係性攻撃が適応にもたらす負の影響はすぐに顕在化するのではなく、累積的な影響によるものであると示唆される。先行研究において示されている通り、中学生時代から継続して関係性攻撃を行うことで、ネガティブな仲間関係を多く経験し、否定的なかかわり方を学習してしまったり、「仲間は自分を受け入れてくれない」といった仲間関係一般について否定的な信念を獲得してしまうのかもしれない。

介入への示唆

前述の通り、関係性攻撃者に対して社会的スキル・トレーニングやアサーション・トレーニングを実施することは、本人の適応感を高める上では有効であると思われるが、関係性攻撃の低減に奏功するとは限らない。むしろ獲得したスキルが関係性攻撃の実行に悪用されないように、スキルを向社会的に使用するような働きかけが必要であると思われる。本研究の結果からは詳細な議論はできないが、スキル・トレーニングを行う際には、攻撃を許容・正当化する信念、自己利益を追求する志向性など認知面への働きかけを同時に行

う必要があるのではないだろうか。また、スキルを駆使しても対人葛藤の解決が困難な場合にどのように対処すべきかといった、より高度のスキルをターゲットにする必要があるかもしれない。また、関係性攻撃の安定性の高さから、より早期に介入を行うことが求められる。今後は関係性攻撃低減に向けてどのような介入が有効なのか検討していくことが課題であろう。

本研究の制約と今後の展望

本研究の結果から、関係性攻撃は思春期から青年期にかけて安定した傾向があり、高く維持された場合、将来的な適応が低下する恐れがあることが示された。関係性攻撃者全体の特徴としては適応に問題がなく、一部の主張性・社会的スキルが高かった。一方で社会的スキルの低い関係性攻撃者は適応感が低く、関係性攻撃者も一様ではないことが明らかとなった。関係性攻撃と適応との関連において、先行研究では正負両方の影響が示されていたが、社会的スキルの高低によって整理することで、その矛盾を解消する手がかりが得られたと考えられる。

しかしながら本研究は様々な制約があった。第一に、サンプルサイズが小さかったことである。攻撃性という特性上、分布が下方に偏るため、攻撃者の抽出に限界があった。このため、社会的スキルや過去の関係性攻撃と組み合わせて群分けを行う際に基準点を下げざるを得ず、特に、変動群の中でも下降群が極端に少なくなってしまう分析ができなかった。過去に関係性攻撃を多く行っていたがやめることができた下降群を詳細に分析し、どのような要因によって関係性攻撃の低減につながったのか検討することは、介入の示唆を得る上で重要だと思われる。

第二の制約として調査対象者の特殊性がある。大学生においては社会的スキルに性差が見られないとの報告が散見されるが、本研究では男性で有意に高いという結果が得られた。これは本研究の調査対象が対人援助職の養成課程に所属する学生

であったためであると考えられる。保育者や看護師といった、女性が多く活躍している職業を志望する男子学生は、一般的な男子学生に比べて対人志向性が高く、対人関係にも自信があり、社会的スキルが高かったのではないと思われる。男性の対象者が少なかった点も踏まえると、男子学生一般の特徴を反映しているとは限らず、一般化可能性に疑問が残る。

第三の制約として、過去の関係性攻撃を捉えるために回顧法を用いたことである。想起が困難であったり、記憶が歪められている可能性もあり、どの程度正確に捉えられていたか不明である。

以上の問題点を解消し、関係性攻撃の発達や継続的な影響を調査するためには、本邦においても大規模な長期縦断研究が必要であると思われる。

〈注〉

- 1) 本研究は日本心理学会第86回大会(2022)で発表したものに新規にデータを追加し、再分析したものである。
- 2) 大学生対象者の中には4年生が1名、学年が不明の者が2名含まれた。

引用文献

- 安達 知郎・東海林 渉・三船 奈緒子・佐藤 恵子 (2012). 中学生のコミュニケーション基礎スキルと抑うつ、身体攻撃、関係性攻撃との関連の検討 学校心理学研究, 12, 53-62.
- Cillessen, A. H. N., & Borch, C. (2006). Developmental trajectories of adolescent popularity: A growth curve modelling analysis. *Journal of Adolescence*, 29, 935-959.
- Cleverley, K., Szatmari, P., Vaillancourt, T., Boyle, M., & Lipman, E. (2012). Developmental trajectories of physical and indirect aggression from late childhood to adolescence: Sex differences and outcomes in emerging adulthood. *Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry*, 51, 977-978.

- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995). Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development, 66*, 710-722.
- Fite, P. J., & Pederson, C. A. (2018). Developmental trajectories of relational aggression. In S. M. Coyne & J. M. Ostrov (Eds.), *The development of relational aggression* (pp.49-60). Oxford University Press.
- 濱口 佳和・藤原 健志 (2016). 高校生の能動的・反応的攻撃性に関する研究 教育心理学研究, *64*, 59-75.
- 濱口 佳和・戸田 有一・金綱 知征・中田 千絵 (2012). 関係性攻撃と心理社会的適応との関連 (11): 多次元性関係性攻撃尺度 (大学生用) の因子構造と信頼性の検討 日本教育心理学会総会発表論文集, *54*, 269.
- 濱口 佳和・渡部 雪子・白倉 瞳 (2015). 中学生人気児・拒否児における関係性攻撃と心理社会的適応との関連教師評定測度を用いた検討 筑波大学発達臨床心理学研究, *26*, 1-9.
- 磯部 美良・菱沼 悠紀 (2007). 大学生における攻撃性と対人情報処理の関連——印象形成の観点から—— パーソナリティ研究, *15*, 290-300.
- 磯部 美良・佐藤 正二 (2003). 幼児の関係性攻撃と社会的スキル 教育心理学研究, *51*, 13-21.
- Kawabata, Y., Crick, N. R., & Hamaguchi, Y. (2010). Forms of aggression, social-psychological adjustment, and peer victimization in a Japanese sample: The moderating role of positive and negative friendship quality. *Journal of Abnormal Child Psychology, 38*, 471-484.
- Kawabata, Y., Tseng, W.L., & Crick, N. R. (2014). Adaptive, maladaptive, mediational, and bidirectional processes of relational and physical aggression, relational and physical victimization, and peer liking. *Aggressive Behavior, 40*, 273-287.
- 菊池 章夫 (1988). 思いやりを科学する 川島書店
- 菊池 章夫 (2004). KiSS-18研究ノート 岩手県立大学社会福祉学部紀要, *6* (2), 41-51.
- Kuppens, S., Grietens, H., Onghena, P., Michiels, D., & Subramanian, S.V. (2008). Individual and classroom variables associated with relational aggression in elementary-school aged children: A multilevel analysis. *Journal of School Psychology, 46*, 639-660.
- 桑原 千明・永井 智・梅津 直子・濱口 佳和 (2011). 大学生における関係性攻撃と学校適応との関連の検討 日本教育心理学会総会発表論文集, *53*, 241.
- 桑原 千明・関口 雄一・濱口 佳和 (2013). 多次元性関係性攻撃尺度 (教師評定・小学生版) の作成 筑波大学発達臨床心理学研究, *24*, 7-34.
- Marshall, N. A., Arnold, D. H., Rolon-Arroyo, B., & Griffith, S. F. (2015). The association between relational aggression and internalizing symptoms: A review and meta-analysis. *Journal of Social and Clinical Psychology, 34* (2), 135-160.
- 文部科学省 (2021). 令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果 文部科学省 Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20211007-mxt_jidou01-100002753_1.pdf (2022年9月30日)
- 西野 泰代 (2013). 感情コンピテンスと関係性攻撃傾向との関連についての検討 日本教育心理学会総会発表論文集, *55*, 57.
- 尾花 真梨子・濱口佳和・江口 めぐみ (2013). 児童の関係性攻撃と適応との関連の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, *24*, 35-42.
- 大久保 智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因——青年用適応感尺度の作成と学校別の検討—— 教育心理学研究, *53*, 307-319.
- Ostrov, J. M., & Godleski, S. A. (2013). Relational

- aggression, victimization, and adjustment during middle childhood. *Development and Psychopathology*, 25, 801-815.
- 坂井 明子・山崎 勝之 (2003). 小学生における3タイプの攻撃性が抑うつと学校生活享受感情に及ぼす影響 学校保健研究, 45, 65-75.
- 櫻井 良子 (2002). 中学生における関係性攻撃尺度作成の試み 日本心理学会第66回大会発表論文集, 898.
- 櫻井 良子 (2003). 中学生の関係性攻撃と社会的スキルの関連 日本教育心理学会総会発表論文集, 45, 119.
- 櫻井 良子・小浜 駿・新井 邦二郎 (2005). 中学生における関係性攻撃傾向の検討——同調行動および学校適応感の関連 筑波大学発達臨床心理学研究, 17, 39-44.
- 関口 雄一・濱口 佳和 (2014). 多次元性関係性攻撃尺度(高校生用)の作成 筑波大学心理学研究, 47, 55-63.
- 柴橋 祐子 (2001). 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち 発達心理学研究, 12, 123-134.
- 梅津 直子・新井 邦二郎 (2009). 中学生における関係性攻撃動機の探索的検討 日本心理学会大会発表論文集, 73, 144.
- 梅津 直子・新井 邦二郎・濱口 佳和 (2012). 中学生における関係性攻撃と認知特性および適応との関連: 敵意帰属を中心に 筑波大学心理学研究, 44, 69-78.
- 渡部 雪子・濱口 佳和 (2014). 教師評定用多次元性関係性攻撃尺度(中高生版)の作成 筑波大学発達臨床心理学研究, 25, 21-31.
- 渡部 雪子・関口 雄一・三鈷 泰代・石隈 利紀・濱口 佳和 (2012). 関係性攻撃と心理社会的適応との関連 (13): 大学生の関係性攻撃と心理的適応との関連I, 日本教育心理学会総会発表論文集, 54, 271.